



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カントの世界論 : 「複合体」と「系列」という二つの観点から〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	増山, 浩人
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11172号
Issue Date	2014-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55311
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroto_Masuyama_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 増 山 浩 人

学位論文題名

カントの世界論－「複合体」と「系列」という二つの観点から－

本論文の意図は、従来のカントの世界論解釈－カントは世界を時間的および空間的な「系列」として捉え、もっぱら世界の時間的な始まりや空間的な限界を理性によって把握できるかどうかを問題にしていたのであり、カントの世界論は『純粋理性批判』のアンチノミー論において提示されている－に対して、カントが前批判期から批判期を通じて一貫して「世界」を「系列」としてのみならず、「複合体」としても論じていたのであり、カントの世界論はアンチノミー論に尽きない、より広範で豊かな内容をもつことを示すことにある。

この意図を達成するために、本論文は、第一に、主にバウムガルテンの『形而上学』に即してカント以前の哲学者による伝統的形而上学における世界論の特色と構造を解明し、カントの世界論の哲学史的源泉を明らかにする。第二に、カントの形而上学に関する講義録やレフレクシオンを参照することで、伝統的世界論とカントの世界論の共通点と相違点を取り出す。そして第三に、カントの批判哲学を伝統的世界論との対決として位置づけるために、『純粋理性批判』の「類推論」と伝統的形而上学における「充足根拠律」に関する議論、および「モナド論」との比較検討を行い、さらにヒュームの宗教哲学に対するカントの応答を検討することで、これまではもっぱらヒュームとの対決として位置づけられてきたカントの因果論が、伝統的世界論との対決の結果として形成された世界論を介在させた議論として読み解くことができることを明らかにする。

第1章は、本論文の基礎をなす部分であり、バウムガルテンの世界論における用語法と議論の枠組みを詳細に検討し、明らかにすることで、伝統的世界論とカントの世界概念を比較するための基盤が提示される。増山氏によれば、バウムガルテンの『形而上学』における世界論の対象は「世界の部分」（実体）と「世界全体」の二つであり、この自存する実体であるモナドが連結されて一つの世界として統一される根拠として「予定調和説」が採用された。これが、バウムガルテンの「複合体」としての世界とその構造に関する議論の大枠である。また、バウムガルテンは、モナドからなる複合体としての世界全体を原因結果の「系列」という観点からも考察している。ただし、バウムガルテンは、この原因結果系列の逆行において「無限への進行」を否定したが、これは彼が「世界の外にある第一原因」と「世界という系列の第一項」とを混同した結果であり、後にカントがアンチノミー論において論じた問題である。

第2章では、カント自身が世界を「質料」、「形式」、「包括性」という三つの側面から論じていたことが確認される。世界の「質料」とは、「実体とみなされた諸部分」、つまり複数の「実体」であり、「形式」とは「諸実体の同位的秩序」、つまり実体間の「相互関係」であり、この二つによって「複合体」としての世界が考察される。また、世界の「包括性」とは、「共存する諸部分の絶対的一切性」であり、これによって「系列」としての世界が考察される。増山氏によれば、講義録においては批判期においてもこの三分法が用いられており、カントは一貫して世界を「複合体」と「系列」という二つの観点から世界を論じる道具立てをもっていたことになる。

第3章では、「世界」と類似した意味をもつ「自然」という概念に着目し、バウムガルテンとカントの結びつきが考察される。バウムガルテンでは「自然」という概念は、個別の存在者の自然である「存在者の自然」と、すべての諸物の自然の総体である「全自然」という二つの意味で使用されているが、増山氏は、レフレクシオンや講義録の詳細な分析を通じて、カントの使用する「形容詞的自然」と「名詞的自然」という概念が、バウムガルテンの「存在者の自然」と「全自然」の区別にはほぼ対応し、後者の「名詞的自然」は「複合体としての世界」とほぼ同義で使用

されていたことを明らかにしている。

第4章では、これまでの議論を踏まえて、カントが「世界の統一」の問題を「自然の統一」の問題として論じていたことの例証として、『純粋理性批判』の「第二類推論」が、ヴォルフ学派の「充足根拠律」の証明に応答するための議論であることが示される。「類推論」とは、空間と時間における無数の現象が一つの自然をなすための悟性の原則を論じる箇所であるが、とりわけ「原因性の法則」に関わる第二類推論は、従来はヒュームの因果論批判に対する応答として読む解釈が主流であった。これに対して増山氏は、第二類推論は、伝統的形而上学における充足根拠律批判として、より広い視野をもつことを明らかにしようとしている。すなわち、カントの第二類推論は、伝統的形而上学が矛盾律に基づいてその普遍性を証明しようとしてきた「物の充足根拠律」を、「経験の可能性」に基づいて証明する議論であるというのが増山氏の主張である。

第5章では、複数の実体間に実在的な影響関係のあることが、複数の実体の同時存在を認識するために不可欠な条件であることを証明する「第三類推の原則」が、バウムガルテンのモノド論と対決するための理論であることが示される。ヴォルフ学派においては、物体と厳密に区別される実体はモノドであり、空間と時間の中に位置を占めず、他のあらゆる実体から孤立して自存していた。それゆえにこそ、実体間の連結を説明するために、バウムガルテンは予定調和説を採用せざるをえなかった。これに対してカントは、第三類推の原則の証明において、実体を空間・時間内に存在する実体、すなわち「現象的実体」とし、この実体間の相互関係の可能性の根拠を、統覚の統一作用に求めることで、世界の統一を可能にするものとして物理影響説を擁護することができたと増山氏は論じる。

ところで、世界系列を統一する根拠としての神の問題に対して、カントはどのような立場をとったのか。第6章は、理念論におけるカントの「Als-Obの方法」、つまり類比に依拠して「世界」と未知なる「神」との関係を認識する方法が、ヒューム批判を通して獲得されたこと、言い換えれば、ヒュームの因果概念批判に対する応答は、第二類推論ではなく、むしろ理念論においてこそ見いだされるということを主張する。この点を明らかにするために、増山氏は、ヒュームの「デザイン論証」批判、すなわち神の存在の目的論的証明に対する批判に対するカントの立場を検討する。それによれば、カントは、まさにヒュームとは異なったタイプの因果論に基づいて、擬人神観に陥ることなく有神論の可能性を示すことができた。なぜなら、カントにとって、「原因」の概念は、経験に由来するのではなく、純粋悟性のカテゴリーであり、現象に対してのみならず、物自体にも適用可能だからである。もちろん、カントにおいては、それによって物自体が「認識」されるのではなく、「思惟することができる」という意味においてにすぎないのではあるが、すくなくともカントの因果概念は、経験の領域外に「世界原因」としての神を想定する余地を残している。これが「Als-Obの方法」である。カントは、ヒュームの因果概念批判を通して、有神論的な「神」を、「系列」としての「世界」を探究するための「統制的理念」として確保することができた、というのが増山氏の主張である。